

先住民運動と調査倫理

——オーストラリアにおけるフィールドワークと大学院教育の現状

杉藤 重信

梶山女学園大学人間関係学部

司会：オーストラリアにおけるフィールドワークをされている梶山女学園大学の杉藤先生です。杉藤先生はフィールドワークのほかに、いわゆるフィールド資料の保存、利用ということで、データベースとしての活用についても精力的に取り組んでいらっしゃいます。今日のテーマは、オーストラリアにおける調査と

大学院教育です。杉藤先生はオーストラリアの国立大学の先史学／人類学部の客員研究員としても滞在しておられましたので、その辺りの経験も踏まえて今日はお話だけだと思います。ではよろしく願いいたします。

杉藤：よろしく願いいたします。梶山女学園大学の杉藤です。こちらの研究科とのご縁としては、私が名古屋に赴任した頃に、まだ大阪の大手前女子大学におられたころに阿部先生にお招きいただきまして、そちらで私は初めてお会いしました。また、佐々木先生、和崎先生とも文化人類学会の地域研究会でご縁があり、重ね重ね、ここでお話する機会を与えていただいたのだと思います。お招きどうもありがとうございます。

オーストラリア調査のいきさつ

まずわたしが一体どんなことをやってきたのかということについてあらましをお話させていただきます。

最初に調査に出掛けたのが1984年でした。後で地図を参照していただきますが、北部オーストラリアのアーネムランドで調査を行い、以来継続してフィールドワークを行ってきております。その調査は大阪にある国立民族学博物館（以下、民博）の小山修三先生を代表とする科研の海外調査でした。それ以外にも民博は、発足した1975年以来、非常に活発に資料収集を始めていました。以前ほどではないにしても、現在でもそうした資料収集は継続されていると思います。

私が参加したこのオーストラリアでの調査も民博の資料収集を兼ねたもので、民博の小山先生を中心に調査をしてきましたが、オーストラリア国立大学（The Australian National University, 以下、ANU）の先史学／人類学部を連携拠点と活用させていただいてきました。また、北部準州のダーウィン市にあるオーストラ

リア国立大学の北オーストラリア研究所（North Australia Research Unit, NARU）では、フィールドワークに出るときに使う四駆のランドクルーザーやキャンプ道具などのたぐいをお借りしました。当時は、ANUの客員研究員はこのNARUという組織が用意してくれる備品を利用できる権利があるということもあって、客員のステータスをいただきました

NARUはANUの創設に尽力した、ドクター・クームズ（Dr. H. C. Coombs）がアボリジニの支援のための研究組織として設立されたのです。わたしたちが調査を続けていたころ、ドクター・クームズはすでに引退されて、研究所の一角で余生を過ごしておられまして、散歩をされる姿をお見掛けしたことがあります。

さて、われわれのオーストラリア資料収集では、点数からするとアボリジナルアートの収集が多かったのです。当時の民博は、博物館ですので、収集の対象はありとあらゆるジャンルの生活文化を知るために、さまざまな生活用品を集めたのですが、1980年代に入



ると次第に文化表象としてのアートも各地で収集するようになっていました。例えば民博のアフリカのヒョウタンの展示のところは、開設当初からのコレクションですが、江口一久先生が収集をされていました。それはもともと実用具・生活具としての容器としてのヒョウタンなのですが、施された装飾を前面に出した展示をするなどの試みをしていました。

民博の博物館展示は、ご存知のように、従来のようにガラスケースの中にもものが入っているのではなくて、実際に手を伸ばせば触れるような形で展示品を展示し、かつ光量（ライティング）も少し落とした感じで、どちらかというアートギャラリー的な要素を持つミュージアムとして売り出したのではないかと思います。そういったこともあって文化表象としてのアートも収集の対象としたという経緯もあったのではないかと思います。そこで、わたしたちもアボリジニのアートを収集するようになっていました。

私たちが、アートを手がかりにして調査を始めることができた、もうひとつの背景には、ふるくからオーストラリアの人類学者たちが、アボリジニから文化収奪をしているという理由で、フィールドの現場から排除されていたことがあります。それはどういうことかという、自然人類学の方では、メジャーメントをやって頭骨の頭頂指数を測ったり、身体計測をするのです。アボリジニは形質の上では非常に古典的な要素を残しているというふうに言われているものですから、自然人類学者はこぞってメジャーメントをやったのでしょうか。

つぎに、文化人類学の分野では、儀礼を一番よくテーマ化するのですが、その儀礼は秘密の知識、秘密の儀礼だといって、例えばアボリジニの中でも女性や子どもにも一切見せることはない。成人の男性にしか見せないような儀礼を行います。こうした儀礼に関する調査がなされてきました。その儀礼の中では、創世神話や自分たちが一体どこから来たのかというような彼らの由来に関するストーリーが語られ、それにまつわる踊りが披露されます。そういった秘密の部分にずけずけと入り込んで、論文に書いて秘密を暴露まくった。しかも、調査する側と調査される側には、明らかに、主流社会とそうではない社会の間の権力関係もあった。

さらに、植民地開始以降、アボリジニたちが置かれている状況というのは、やはりオーストラリア社会の中でも下流に組み込まれていて、しかも彼らは失われていく、滅びていく人たちのように扱われた時期もあ

って、今からみればひどい目にあっていたわけです。ですからそんなふうにずけずけと入り込まれても、やめてくれとか出て行けなんて言えずに、結果としては微妙なところをしゃべらされて、記録に取られたのです。

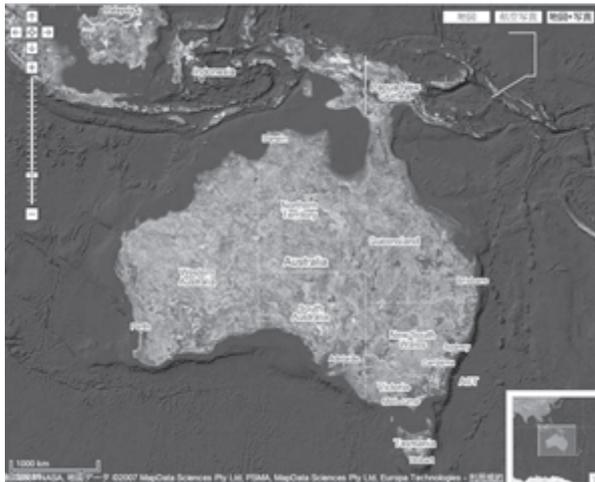
とはいつて、もちろん、これらの記録は今と違っては、アボリジニ自身にとっても非常に貴重な資料となっていますが、幸か不幸か現在ではすべてクローズドになっています。秘密の知識ということで、民族誌映画の形で非常にたくさん撮られた時期がありました。これらも今はすべてお蔵の中に入ったままで、見ようと思うと許可を取らないことには絶対見られないというような形になっています。ただ出版物は回収不可能ですので、いまだに古本屋に行くことができません。

第三に、考古学者、先史考古学の研究者にとってもアボリジニの祖先である人たちの骨というのはもう垂涎的でしたので、化石人骨を標本と世界中の博物館に送っていたわけです。実際にこの人骨を売買するという商売もあったぐらいで、アボリジニの人体標本というのは、いつとき世界中のあらゆる博物館にあったはずで。現在これらはおそらく全部回収されて、もと掘ったところに全部戻す作業が行われていて、世界中のアボリジニの人体標本というのは、おそらく全部レプリカに代わっているはずで。

以上のようなことをやっていたものだから、人類学者は出て行けと言われたのです。そこにわれわれ日本人の調査隊が、民博の資料収集という形でアートなどを次々と買いながら、実は人類学の調査をしていたのです。今思えば、これも非常にあくどいやり方ですねえ。アートをかうという名目のもとに入っていたわれわれは、おかげで調査を続けることができましたし、アボリジニの人たちもそれをよく分かっていて、結果として現地の人々との良好な関係をつくり上げることができました。

オーストラリアでのフィールドワーク

わたしが調査をしていたのは、オーストラリア北部のアーネムランドという所です。オーストラリアは一般に沿岸部に人が住んでいて、内陸部というのは非常に人口が希薄です。現在のアボリジニ人口の多くは都市人口の中に紛れ込んでいます。オーストラリア全体で人口は2,000万人を超えていて、その中の70%が10万人以上の都市に住んでいます。それとほぼ同



オーストラリア Australia

じで、約40万いるアボリジニの70%はやはり都市部に住んでいるとされています。あとは分散して、それ以外の人口の希薄なところに住んでいます。とくにわたしたちが調査しているアーネムランドの辺りは「アボリジナル・ランド」という土地区分に指定されていて、アボリジニ以外は入域許可を持たないと入域することはできません。もし黙って入った場合は1,000ドルの罰金を取られます。もちろんゲートがあるわけではありませんので、入ろうと思えば入れるのですけれども。

この辺りはノーザンテリトリー準州に含まれていますが、その州都ダーウィンは、ここから大体400キロぐらい離れています。私が調査したのは、東部のエルコ島のガリウインク、中部のマニングリダ、それから西部のオーエンペリという町の3カ所です。ダーウィンから200キロほど行きますと、カカドゥ国立公園がありまして、ここは世界遺産や文化遺産に指定されていて観光客が入ります。そこに隣接してアーネムランド・アボリジナル・ランドがあります。国立公園内までは大体舗装道路ですけれども、アボリジナル・ランドに入ると未舗装でブッシュの中の獣道を通っていくという感じでした。わたしたちが調査を始めたころは全面的にブッシュの中の道でして、ドライブは非常に大変でしたし、川渡りもします。現在はずいぶん楽になってきました。

最初に調査に入ったのはこの東部のガリウインクという町でした。アボリジニたちはもともと狩猟採集をしていました。もちろん道路も滑走路も必要としないし、町というものも必要としない。ブッシュ（オーストラリアでは、自然にあふれる場所を、ブッシュもしくはアウトバックと呼ぶ）の中に点々と小さなキャン

プをつくって生活していました。このガリウインクは1954年に町がつけられました。まず教会を建てて、食糧を配給する場所と学校をつくって、そこにアボリジニ人たちが強制的に集まるように指示されてできたのが、ガリウインクというセトルメントです。

またマニングリダという町は政府がつくったトレーディングポストからはじまっています。当時、アボリジニたちがもってきたワニやバファローの皮と食糧とか酒などの現物を渡すという、カナダなどで行われている毛皮交易とほぼ同じようなことをやっていたトレーディングポストが町のはじまりなのです。それからもうひとつわたしが調査したオーエンペリという町、ここもまた教会がつくった町です。

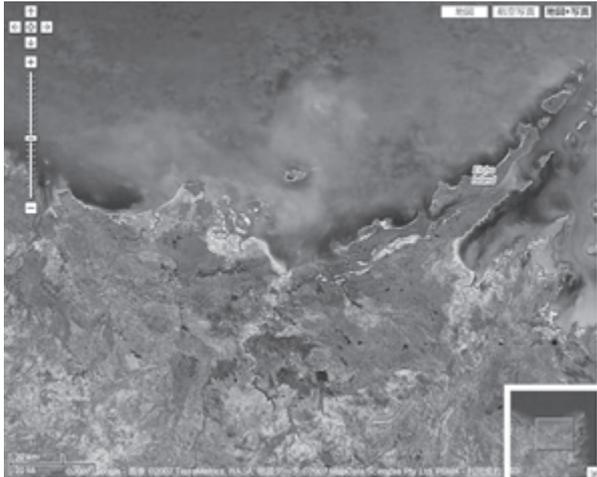
一つ注意しなければならないのは、今わたしは町とか村などという言葉を使いましたが、町というのは、白人たちが教会、学校を食糧供給の場所、今ではスーパーマーケットにあたるものをつくって、そこにアボリジニ人たちが寄せ集められて生活するようになった場所を町と呼びます。こうしたセトルメントがつけられる以前は、狩猟採集生活をしていたアボリジニたちは、ブッシュの中で、小規模なキャンプをつくって暮らしていました。

村と言っているのは国民投票でアボリジニに市民権をあたえた1970年代以降に生じたアウトステーション・ムーブメントという運動の中で、こういった町を出て、もう一度ブッシュに戻ろうとってつけられた井戸がつけられ、最近では、電話網も設備した現代的な装置を持つようになったキャンプです。

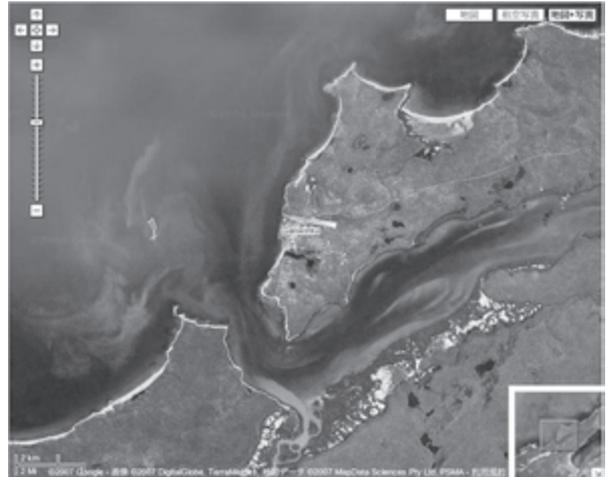
先ほど名前を挙げたドクター・クームズは、このアウトステーション・ムーブメントにかかわっていません。このアウトステーション・ムーブメントの結果、現在は町で生活している人と、点々と存在する村、大体30人前後の人口を持つアウトステーションと呼ばれる村で生活をしている人が増えてきました。また、町とアウトステーションを往復している人たちがたくさんいます。

たとえば、マニングリダです。町には滑走路があって、都市計画された道に沿って住宅が建てられています。村は本当に小さくてこのレベルの地図には出てこないのです。わたしがここで村と言っているのは、大体家の数にしたら3戸とか5戸というぐらいしかないようなものなので、このサイズの航空写真には残念ながら写りません。

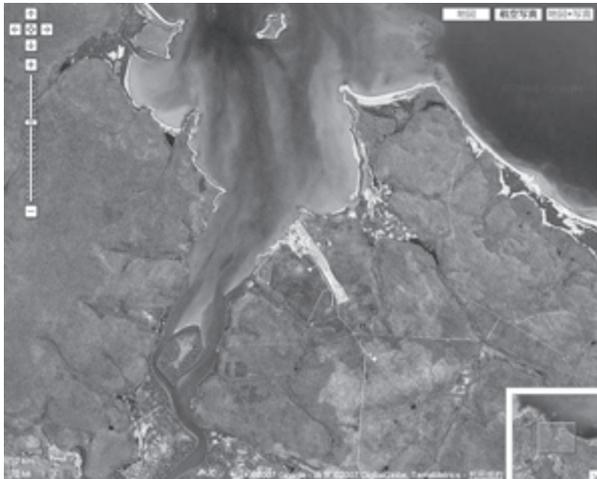
もうひとつの調査地はオーエンペリです。ここの町の周囲は雨期になると全部水に漬かる湿地です。その



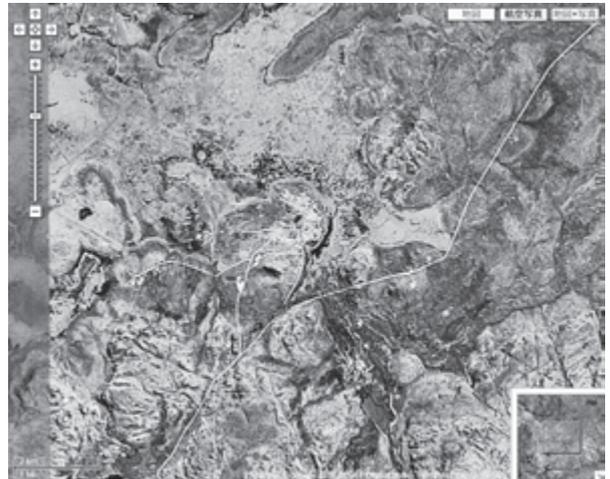
Northern Arnhem Land



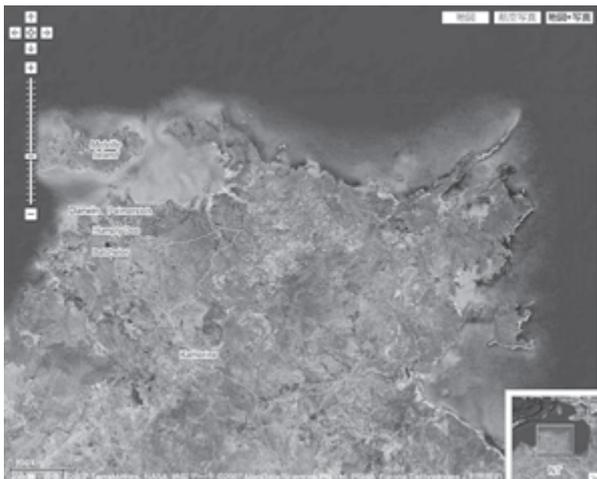
Galiwinku



Maningrida



Oenpeli



Northern Territory 北部(州都ダーウィン,アーネムランドなど)



Ranger ウラン鉱山

ため、町はちょっと高台のところにつくられています。こちらはインジャラクという山ですが、ここには岸壁面がたくさん残されていて、現在では観光客が「ワンデーツアー」のような形で入るようになっ

ていて、アボリジナル・ランドの中でも一般人が入っていきける場所になっています。アーネムランドの中でもカカドゥ国立公園に隣接し、また、ナバレクというウラン鉱山（現在は、採掘をおえてリハビリテーショ

中)があつて、その借地料がはいっていました。

アーネムランドに隣接しているカカドゥ国立公園に囲まれるようにジャビルーという町があるのですが、ここにレンジャーというウラン鉱山があります。ウラニウムの掘り出しは露天掘りですが、らせん状に道をつけながら下のほうから上に掘りあげて採掘しています。採掘を終えて、そのまま放置するとうりった池ができます。こちらの池はウラン精製のための廃液をためる場所で、こちらの3つの池はかつて掘ったピットの後です。オーストラリアは世界でも有数のウラン産出国ですが、アボリジナル・ランドの中にもウラン鉱脈がたくさんあります。ウラン鉱脈をめぐって実は非常に強い反対運動が起こっていた時期もありますし、反対運動を補強する論理として、人類学者や地理学者のフィールドワークが間接的に使われるというケースもありました。ただし今日はこのレンジャーの鉱山のお話はしません。

さて、今お話ししたところでですが、航空写真では起伏があまりお分かりにならないかもしれませんが、非常に平坦なところ。ところどころに20~30メートルぐらいのクリフがあつて、そこには岸壁面が残されています。その岸壁面にかかれるものと同様のモチーフをユーカリの樹皮とか紙に描いたものを国立民族学博物館のコレクションに収集しています。

調査の成果

私のこれまでの調査から得られた成果について、簡単に触れておきたいと思います。最初に入ったガリウィンクでのフィールドワークから、まず『ウィークエンド・ハンター』（窪田幸子と共著）という論文というエッセーを書きました。これは週末になるとガリウィンクの町に住んでいた人たちがアウトステーションに移動して狩猟採集をやつてまた町に帰ってくる様子を書き留めたものです。タイトルの『ウィークエンド・ハンター』は、当時のテレビの人気番組『ウィークエンダー』を拝借しました（笑）。

この最初のフィールドワークをやっているなか、病院で出生記録があることに気がつきました。人類学の方はご存じだと思いますが、ここはレヴィ=ストロースが親族の基本構造の中に書いた「ムルンギン」が住んでいる場所だったので、「婚姻規則に関する聞き取り」をやりました。最終的にはその病院の記録を用いてデータベースをつくり、さらにそこから婚姻規則をつくつて仮想的な人口をコンピュータで100年間回し

てみるシミュレーションをやつた結果が「人口規制要因としての婚姻規則」という論文です。このテーマに関連したプロジェクトを今でも続けています。

次に調査拠点をマニングリダというところに移しました。そこでは、アボリジニの人たちにパソコンを使つてもらつて、パソコンの操作法をどういふふう理解してもらえるのかというような調査をしました。その結果分かつたことは、われわれの研究法は、概念をすべて階層的に理解していきますね。大概念があつて、中概念があつて、小概念があつて、それからもっと細目が出てくるツリー構造で概念理解をしている。コンピュータの操作も同じです。しかし彼らにとっては、そういった階層的な構造は非常に理解し難らしく、作業の流れという概念もなかなか分かつてもらえませんでした。いろいろと考えてみると、彼らの認識の在り方のほうがむしろ普通で、われわれのほうがきっと特殊なのだと思います。つまり複数の概念を理解するときに、ツリー構造で理解していくのは、かなり特殊なやり方だと思います。

もう一つの研究テーマは、「アボリジニの住まい方」です。前のテーマとは全然つながりありませんが。住まい方とは、大まかに言うと、まず町に住んでいるアボリジニ人たちとそれから村に住んでいるアボリジニ人たちとで、住居の使い方はどんなものなのかを調べたものです。もともとアボリジニの人たちは狩猟採集をやつていたので、家というものを必要としない。雨期のときには岩場に行くとか、あるいは雨期だけ屋根を持った小屋を建てる。そうではない乾期のときはその辺でござる寝する。ただ夜露をしのぐために、簡単に葉っぱを敷いただけのような、ものの30分もあればできる差し掛けの小屋のようなものをつくるだけ。恒常的な家なんていうものは、そもそも彼らにとって伝統的なものではないのです。ところがオーストラリアは福祉国家なので、そんなホームレスのような生活をさせるわけにいかないということで、彼らに家を建ててあげたわけです。そして「そこに住みなさい」となるのですが、建てた家はベツトルームが2つとか3つ、それにリビングとキッチンがあるという、要するに核家族用のユニットです。このプレハブユニットを建てていくのです。

例えばわれわれであれば一家族、つまり核家族が住むだろう。1つのベツトルームに夫婦が入つてあとのベツトルームには子供が複数あれば一人1部屋ずつ使つて、リビングをシェアして、キッチンでつくつたものはみんなで食べるというふうに使つていくことを想定しま

すよね。ところが家族構成や家族という概念自体が全然違う人たちのところと同じユニットを建ててあげるものだから、大混乱が起こります。

アボリジニの人たちは一部屋に大体10人くらいでごろ寝をしてしまいます。大体六畳から八畳ぐらいの部屋に、5人から10人くらいが入ってきます。隣のベッドルームにもそのぐらい入る。結果的に普通の大きさのベッドルームのユニットでも、20人くらいが寝起きするという状況が起こります。これはなぜかという、彼らは一部屋に恐らく大家族が一つ入ることを想定するからです。カップルで一部屋とか、一人が一部屋なんていう概念は彼らにはないのです。みんなでごろ寝をするというのが伝統的な住まい方のスタイルだったので、建物の建て方から間違っていたわけです。しかしわれわれがいくら日本でそんなことを叫んだところで、オーストラリア政府は相変わらず2ベッドルーム、3ベッドルームのユニットを建て続けています。これは意外に盲点で、白人の人たちはなかなか分かってくれません。先に述べたアウトステーションにもこうしたタイプの住居が建設されるようになっているのです。こうしたアボリジニのハウジングの問題について「ブッシュに町がやってきた」という論文を書きました。

マニングリダでの調査と並行して、オーエンペリのアートセンターで調査をしました。アートセンターというのは、アボリジニ・アーティストを集めてそこで描かせて、描かせたものを買ってあげ、外部のアートギャラリーや博物館に売っているところです。このアートセンターの調査をしています。この調査では、アボリジニの語る物語と絵画に関する研究をやりました。

そのあとで、もともと、ガリウィンクで始まった親族研究を発端とするのですが、親族データベースと家系図をつくるというコンピュータ・アプリケーションの開発をすすめています。このプロジェクトを「アライアンス・プロジェクト」、開発したアプリケーションを「アライアンス」と呼んでいます。

オーストラリアは移民社会ですので、白人は自分たちの祖先捜しが大好きです。それからアボリジニたちは伝統的に親族のネットワークをしっかりと記憶していたのですが、この重要な記憶装置は世代交代をしていくうちに忘れられるようになってきているので、その記憶をとどめておくために、データベース化が必要なのです。白人とアボリジニでは全然違う方向なのですが、親族のデータベースを構築していくことの意義が、オーストラリア社会の中にできてきているような

気がしています。

先住民知識に関連していえば、アライアンス・プロジェクトは Indigenous Knowledge database system の構築というものを対象的な目的にしています。科研を2000年以来いただいています、今年で8年目に入ります。こんなに長く継続して科研の基盤Bを取らせていただけたとは思わなかったのですが、いずれにしてもずっと継続して開発メンバーをリクルートしながら研究を続けることができています。

アライアンスは親族データベースなので、その鍵になる人を中心として家系図をつくります。個人のデータがカードのイメージでストックされます。名前が入り、生年、死亡年、性別、両親の名前。生物学的な両親でも、社会学的な両親でも記録できます兄弟姉妹はシステムがデータベースを参照して自動的に生成されます。それから配偶者も同様です。アボリジニ社会は複数の配偶者を持つ社会ですので、複数の配偶者が記録できます。それからさまざまな属性を記述することができます。個人に関するメモを書くことができます。個人に関する写真を記録することもできます。それからメモに関する写真を記録することができます。フィールドノートをイメージしている訳ですね。

この人物を中心にした家系図を書くことができます。属性をカラーイメージで表示しています。父系と母系を簡単に切り替えることができます。わたしのデータベースで最も大きなものは3700人のデータを入っていますが、軽く動くようなものになっています。

このソフトはJavaという言語でつくっていて、このJavaを使うおかげで、ウィンドウズでもマックでも動きますし、リナックスでも動きます。これは人類学者のフィールドワーク用のツールとして汎用で使えるようなものとして開発をしてきました。

人類学の調査専用かという、疫学的な調査や遺伝的な調査のデータを属性として入れてカラーイメージとして表示させるということも可能でしょう。あるいは文献学などをやっておられる方にとってみたらこれを版本の系譜関係などとみなしていいかもしれませんね。要するに人間の系譜を記録するデータベースですけども、ありとあらゆるデータベースを系譜的に記録することができるデータベースと考えることもできます。

こういったものをつくって現地社会に還元するということがわたしのプロジェクトの業務だと思っています。このデータベースは人類学者だけが得するデータ

ベースなのですけれども、このデータベースを伝統的な Indigenous Knowledge のインデックスシステムとして活用することがわたしの次の狙いということになっています。

アライアンス・プロジェクト：

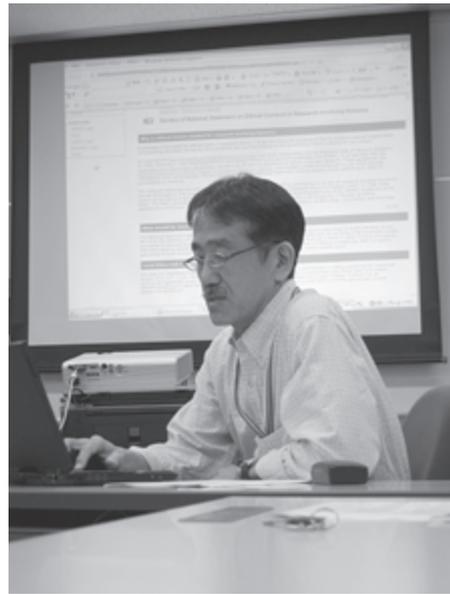
<http://study.hs.sugiyama-u.ac.jp/alliance/>

オーストラリアの人類学教育事情

さて、ここからようやくオーストラリアの人類学教育の話に入りたいと思います。私どもがいつも利用させていただいているオーストラリア国立大学（以下、ANU）は大学院大学として1946年に設立されました。現在キャンベラ大学という大学も、ありますが、ここは創立当初 Canberra University College という名前の ANU の学部でした。一方、本体の方は、大学院大学で、それが1990年ごろになってようやく独自に学部を持つようになった。そして、キャンベラ大学の方は独立した総合大学になっていった。日本の大学が学部の大学として発足して、大学院大学に移行していたのと全く逆の方向になります。学生数は現在1万3,000人です。

たとえば、2001年から2005年5年間で3,000人も学生数を増やしています。これは一体どういうことなのか不思議ですよ。どこが増えているかと言いますと、Under Graduate が1,500人増えています。それから、Higher degree Research は700人ぐらゐ、Post Graduate Coursework が1,100人増えていることから考えると、Post Graduate Coursework の増え方が多いのが分ります。それから International というのは留学生のことで、留学生の数もそこそこ増えてはいますが、Under Graduate の方が倍以上も増えています。それから Domestic はオーストラリア国内出身の学生のことですけれども、これも順調に増えています。

日本の大学ではこの2001年から2005年の時期は、どこもきゅうきゅうとして学生を集めているのに、何で ANU がこんなに学生数を増やしているのかというと、オーストラリアはもともとイギリス式の大学システムを持っていたので、大学が大衆化していなかったからです。大学の大量化が始まったのが1990年代に入ってからで、それまでの大学数はオーストラリア全土で12か13しかありませんでした。現在では40あまりの大学があります。従来、コミュニティ・カレッジとして短大、もしくは専門学校だったものが、ユニバーシティとして発展していきました。



そして1990年代になると奨学金を出して学生に大学に行きましようというプロモーションが始められました。もともとイギリスと同じで、牧場主の子供たちは牧場を継げばいいので大学に行かなくてもいいという風潮だったので、大学に行く人はあまりいませんでした。ところが今は進学熱が非常に高くなってきています。正確な進学率を調べてきていませんが、日本よりも低いことは確かです。ただ、進学率は非常に向上しています。この ANU の学生数が2000年に入ってからこれだけ増えているというのは、まさにその進学率を増やし、かつ定員を拡張しているからです。各大学とも規模が非常に大きくなっています。さらにもうひとつの事情は、1990年代の後半から大学は授業料収入で生きていけと言われてきたものだから、みんな必死で学生を集めるようになったのです。

例えば2003年か2004年に行ったとき、ANU の先生方は政府からの補助金が一律5%カットされて、その5%は物品等の経常経費ではなくて人件費も含む予算を一律カットだと言っていました。

オーストラリアの大学のなかで、研究レベルでトップに位置するのは、現在のところブリスベンにあるクイーンズランド大学だと思います。2番目がこの ANU で、ついでシドニー大学です。歴史の長さからいうと ANU は非常に新しく、一番初めにできたシドニー大学はさしずめ東京帝国大学です。クイーンズランド大学も非常に古い大学で、オーストラリアで3番目か4番目にできた大学です。いずれにしてもこの ANU はトップクラスの大学院大学と言っていいと思います。7つのカレッジと12のリサーチスクール、

それからファカルティ、各種のセンターなどから構成されています。

取りあえず人類学教育に関する連携大学院組織をざっと見ていきたいと思います。Faculty of Arts, これは人類学を含む教養学部ですか。それからリサーチスクールでは Research School of Pacific and Asian studies, これは Research School of Social science と連携しています。その中の Dept of Anthropology と Research Management in Asia-Pacific Program と Gender Relations Center。さらに別のセンターとして Center for Cross-Cultural Research と, Center for Aboriginal Economic Policy Research が人類学に関する連携大学院組織をつくっています。

スタッフを見ると、名前はともかくも、どういう地域のスタッフをそろえたかということ、どこの組織に属しているかを見ていただきたいと思います（後出の表参照）。オセアニア、東南アジア、中国、東アジアや合衆国, Australia-Asia relations, 先住民のことをやっている人もいます。Aboriginal はオーストラリアと、パプア・ニューギニアをさしています。パプア・ニューギニアが多いのはもともとオーストラリアが委任統治していたためです。それから太平洋, genetics, Biosocial anthropology なんていうのもありますね。それからベトナム、インドシナをやっている連中とか……。とにかくこれだけたくさんのスタッフを人類学関係の中でそろえているので、学生たちにしてみるとスーパーバイズを求めるにあたって大体誰かがいるという状態です。地域も網羅的にカバーしていますし、トピックについても非常に恵まれています。

さて、大学院教育についてですが、コースワークでは semester 制を取っていて、2月から6月をファースト semester としています。国家予算の新年度は7月からはじまるのですが、どういうわけかオーストラリアでのファースト semester は予算年度の後半に置いてありますね。Semester は2月～6月と8月～12月となっていて、たいいていの授業は50分を週2回、Semester ごとに完結します。それ以外にチュートリアルが週1回あります。日本の大学はどこでもだと思えますが90分の授業をやって10分間のブレイクがあってというように時間割をつくっていますが、ここは授業間の休み時間はありません。そんなに連続して授業を取るものなどないという考えだそうです。

人類学のコースワークでの授業のやりかたに少しふれておきましょう。Semester の始まりに5センチぐらいの厚さのリーディングス、つまり文献をコピーし

たものを渡されて、それをあらかじめ読むことを前提に授業が進められます。チュートリアルでは、ビデオ、音楽テープなど AV のマテリアルがたくさん用意されています。そこに Post Doctoral (以下, PD), もしくは博士課程 (以下, D), 修士課程 (以下, M) の連中が学部のほうのチュートリアルにチューターとしてはっています。

このコースワークの授業は、主に学部の授業で、M の連中はこの学部の授業に参加する場合があります。それからもうひとつコースワークの中で重要なのは、M に対するアドバイザーという時間がもうけられています。指導教官が、定期的ではありませんが、また短い時間ですが相談に乗ってやっています。わたしがいつもお世話になっているニック・ピーターソン先生のところには、とにかく1日に何人かは必ずやってきて、トピックに関する相談をしていきますが、それ以外にでも結構突っ込んだ個人的なこともアドバイスすることもあるようです。

さて、もうひとつ大学院教育の中で重要なのがフィールドワークです。まずフィールドワークに行くためには幾つかのステップを踏んでからでないと出掛けることはできません。そのために学生たちはまずはじめに、アドバイザーの時間を利用して、フィールドワークのフレームワークをつくり、そのあとでこの調査計画をリサーチプロポーザルの形でまとめ上げます。そのリサーチプロポーザルをまとめ上げた段階でセッションが起こされ、そこには院生と教員たちのほか、ファカルティに客員などで来ているゲストがそこに行つて、学生のリサーチプロポーザルの発表を聞きます。聞いてそれは無理だとか、そういったことをやっても無駄だとか言いますし、こういったフレームでやったほうがいいのかというアドバイスもするという形で、かなりもみます。

こうしたセッションでいいというようになれば、次に倫理委員会にアプリケーションを提出します。今日の資料の中に調査倫理に関するアプリケーションフォームをそのままコピーしてお渡ししてありますので、どういうトピックスがあるかとか、どういうことを書かなければいけないのかということをご覧いただければと思います。倫理委員会に出す前にリサーチプロポーザルの段階でかなりもまれますので、倫理委員会の審査はほとんど形式で、大体それを通すだろうと思えますが、そこで初めてフィールドワークに出ることが出来ます。フィールドワークから帰ったら報告会が持たれて、その報告会があった後、論文作成へと入

っていきます。その論文作成の段階ではこのアドバイザリーがまた再び利用されるという流れです。

フィールドワークは修士課程では6カ月、博士課程では18カ月行わなければならないとされています。これは非常に長期なのですが、必ずしも連続して6カ月、連続して18カ月ということではありません。出はいろいろありますが、実際に、そうした長期の間、フィールドに行ったかどうかということ先生方は実際よく聞きますし、それについても把握しています。しかし、「なぜ6カ月、なぜ18カ月なの？」ということを何度も質問しましたが、人類学だとそのぐらい行かなければいけないだろうというぐらいで、きちんとした理由はないようです。あえて言うとするならば、博士課程の18カ月は、もし18カ月連続して行くと、例えば儀礼のサイクルが1年で閉じるとしたら、1サイクル半見ることができるので、現地社会の様子を、一年を通して見るチャンスが生まれるわけで、だからとにかく1年以上なのだ。それでプラスアルファ何カ月でもいいのだけれど、6カ月からというようなレベルでの答えしか返ってきていませんので、そんなに確たる理由があるかどうか分かりません。

それから先ほども言いましたが、まずリサーチプロポーザルを出して、それを発表して承認を受けてからでないと、倫理委員会にも出せないし、フィールドワークにも行けないということになっています。このHERC, Human Ethics Research Committeeに書類を出すようにリサーチプロポーザルの段階で言われたら、次のステップに入っていきます。リサーチプロポーザルを出す Human Ethics Research Committee というのはオーストラリアの組織の中にある Research Office の一部門で、この中では、例えばここの Research support network はリサーチやフィールドワークに行っている連中をメールなどでリモートから支援できるような体制を整えています。そういった物理的な支援のことも Research Office は分掌しています。

それから次に Research Office の中身を見ていただきます。ここは Office of Research Integrity, それから Office of Commercialization, それから Office of Research Management Data, それから Office of sponsored Research という4セクションを持っていますそれぞれが例えばこの調査には必ず外部資金を導入したりするケースがありますので、そういったものをマネージしてくれる組織を持っています。名大の COE プログラムで言えば、さしずめこの部屋が ANU の Research Office になるのですね。こういったものをつくったら

いいのではないかと思います。

この下に業務内容が書かれていますが、Research Integrity の中には、動物愛護を含めた動物の扱いについての Animal Experimentation Ethics Committee, それから Human Research Ethics Committee, それから Recombinant DNA Committee. これは要するに遺伝の関係で、DNA に関してもこれは個人情報であるというふうなことになりかねますので、そういったものを扱うものが Office of Research Integrity が扱うということになっています。Human Ethics にもやはり、ぜひ一度ご覧ください。なかなかこまごまとした業務が書かれております。アプリケーションフォームは資料のレジメの中に付けさせていただきましたので、ご覧いただきたいのですが、そんなにたいしたことを書くわけではなくても、とにかく事細かに書かなければいけないことは確かです。

調査倫理：オーストラリアの固有の問題として

こういった Office of Research のようなものが大学にあるのは、フィールドワークというものが大事であることが、オーストラリア固有の問題とかかわっているからです。オーストラリアには、先住民がいて、さらに移民がいますので、先住民政策、移民対策にかかわって人類学者のフィールドがあるのです。ここに非常に大ざっぱにオーストラリア・アボリジニの調査にかかわった人類学者たちの名前を挙げておきました。

第1世代は1900年から太平洋戦争までの間です。例えばボールドウィン・スペンサーというのはチャールズ・ダーウィンを支え「社会進化」を唱えたハーバード・スペンサーの息子ですが、彼はメルボルン大学の生物学の主任教授に着任したあと、内陸部の調査をやりました。それから人類学の人たちはよく知っているラッドクリフ＝ブラウンはシドニー大学、人類学講座のファウンデーションプロフェッサーです。それからゲザ・ローハイムはドイツのプロイトの系譜を継ぐ精神科医ですが、アボリジニの人たちの精神医学的な調査をやりました。また、ウォーナーは東北アーネムランドの「ムルンギン」の調査をやりました。それからスタナーとトンプソンはオーストラリア人の研究者ですけれども、彼らはいずれもこの初期の時代の先住民政策にかかわっていました。とくにトンプソンはアーネムランドを調査して、当時、というのは太平洋戦争が始まる前のことですが、その時にアボリジニの

ことをあまりにもひどい扱いをしていたことに対して、もしアーネムランドに日本軍が上陸すればアボリジニの人たちが全部日本人側につくのではないかと恐れて、早いうちにアボリジニ政策を進めるようにというレポートを残しています。

戦争が終わったあとから60年代にかけては、ストローとかティンデル、バート、それからレヴィ=ストロースはここに挙げていいのかわかりませんが、第二世代になり、アボリジニに関するデータがさらに深まっていきます。例えばティンデルは調査で得られたアボリジニの家族のことを非常に綿密に記録として残してくれました。現在50代、60代の人たちで「ストールン・ジェネレーション」と呼ばれている世代があり、それは彼らが父親、母親から引きはなされて寄宿舎とか白人の家に住むようにというふうに強制的に移動させられた人たちのことですが、彼らが自分たちの祖先を探るために使うデータベースがあるのですが、そこに使われているのがこのティンデルのデータです。

それからバートも非常に綿密な調査をやっています。ただしこのバートは、先ほども言ったように、秘密の知識をたくさん暴露したので、ある種悪名高くもあります。レヴィ=ストロースは、ウォーナーを踏まえて、理論的にムルンギンの親族組織の研究をしてアボリジニの親族研究についてある種のコアをつくりました。

次に第3世代、60年代、70年代に調査をした連中です。アボリジニたちが市民権を獲得したのは1968年です。1788年にオーストラリアの植民が開始されていますので200年近く市民権はなかったわけですが、この市民権獲得とともに、かつて彼らがどういう状況に置かれていたか、どういう支援が必要であるのかということに関して、人類学研究をレポートしていくという業務に携わりました。このドクター・クームズは人類学者ではないのですが、先ほども言ったように、ANUの創設にかかわった人です。それから North Australia Research Unit をつくるにあたって、人類学者やあるいは人類学者以外でも、先住民族の行政にかかわるものたちはアボリジニのことをもっとよく知るべきであると言って、積極的にアボリジニの調査、研究に携わり、政治的にも発言しました。メギットやハイアットも、その中に入っています。ニック・ピーターソンというわたしがお世話になっている先生は、この中では一番若いのですが仕事としては第3世代的な仕事に携わっているといういいと思います。

第4世代はわたしたちとほぼ同世代です。オルトマン、モーフィー、テラー、スコット・ケイン。例えばオルトマンは経済人類学的なアプローチをします。ハワード・モーフィーは美術人類学的な調査を、ルーク・テラーも同じように美術のことに焦点を当てました。この経済や美術に関する人類学的な研究、アメリカ的に言えば Applied Anthropology のようなフィールドワークをこの世代は非常によくしました。

そして現在の1990年代から以降、固有名は挙げていませんけれども Anthropologists と呼ばれる肩書きを持った人たちによる調査研究が行われるようになってきています。これを、第5世代としています。

かれら、第5世代の調査研究がおこなわれるようになった理由は1992年に出された Mabo 判決と94年の Wik 判決にあります。Mabo 判決というのはオーストラリアが植民地宣言された時点でオーストラリアの土地権は自動的に植民者側に移ったとされて、アボリジニ人の土地権は一切消滅したということになっていたものを、そうではない、土地権は消滅していないということを行った。ただし、クラウンランドという公有地もしくは王室領として残っているものに関してのみであって、そうした土地区分に対するアボリジニの土地権請求権を承認するとしたのが Mabo 判決です。

一方、Wik 判決はリースホールドとして鉱山会社や牧場がつくられているようなところの土地もアボリジニ人は土地権請求してもよいという判決を出したものです。この2つの判決を受けて、1993年に National Native Title Tribunal (「先住権原審判所」) という先住権限を取り扱う審判所がつくられました。この審判所にアボリジニの人たちがここは自分の土地であるという土地権請求をするのですが、ここでは人類学者を調査員として雇用し、委託調査をさせて、その請求が正当かどうかを判断します。こうした調査に携わるアカデミックな世界には所属していない人類学者が肩書きとして名刺に 'Anthropologists', と書いている連中がおります。

それからまた別の組織ですが、人類学者のフィールドワークにかかわる Land Council という組織が全国に存在します。取りあえずここで挙げているのは Northern Land Council です。ノーザンテリトリーの北半分を管掌する組織です。全国的には90年代までアボリジニの土地権についての動きというのは芳しくなかったのですが、ノーザンテリトリーだけはほかの地域と違って、1973年に Woodward という判事が、アボリジニ人たちに Land Rights を認めたほうがいいと

いうレポート、いわゆる Woodward Report というものを出しています。それを受けて1973年にノーザンテリトリー・ランドライト・アクトという法律ができます。そのときに Land Council という組織も誕生しました。ですから、全国に先駆けた組織なのです。

これは何をするとところかという、土地権を認めると、ハンティングを自分の土地でやるというだけではなく、土地権を認められたところで先ほど説明したレンジャー鉱山のようなウラニウムの鉱山が見つかったら、アボリジニナルランドをランドリースして、鉱山会社から借地料を取ってアボリジニのセトルメントに還元することになります。あるいは、牧場なども同様です。そのときの仲介をするのがこの Land Council という組織です。

この Land Council はアボリジナル・ランドに関する管理及び調査を行っており、今も人類学者が何人も雇用されています。そしてここはアボリジナルセトルメントのさまざまなリクエストに対して対応する組織でもあります。それから外部から取ってきたプロジェクトファンドをマネジメントし、アボリジニに渡すということもやっています。

ANU で積極的な人類学教育をやっているということの、しかも人類学者養成の長い歴史を持っていることの裏は、実はこういったところにあります。学生を売り込んでいく場所を持っているからなのです。ここで言う Anthropologists, こういった調査員になる連中はほとんどDを終えた連中というよりもMをおえたぐらいのクラスの連中が雇用されてきます。

かつての人類学調査では、秘密の組織、儀礼や何かを全部暴いてきたと言いましたが、現在、土地との関係を説明するには、この土地でこういった儀礼をやっていたということが土地とのかかわり合いを説明するために、儀礼に関するものは非常に重要な資料です。そこで儀礼をこういったふうに行っていたというのを人類学者の前でやって見せるわけです。現在では、それらは全部審判所で保管する、法的なものとして使われる資料ですので、基本的に公開されません。だからわれわれ研究者にしてみると、公開されない調査というものをやりたくないのです。だって報告書や論文を書けないわけですから。だから要するにDをやっている連中は別の形のプロジェクトとしてアボリジニのコミュニティにかかわるやり方を選び、この審判所の調査にかかわるのは少し違う連中です。もちろんわたしたちがお世話になっている先生方のような偉い人たちは、この審判所のアドバイザーボードみ

たいなところにかかわっていますが、それはMの学生を就職させるためにやっぱり必要かというような感じですかね。

連携研究組織と大学院教育

さて、これはもうひとつのほう、要するにDの連中がかかわるプロジェクトです。最近の流行は Corporate Research Center をつくろうというもの。さらにトピックとしてのキーワードが Indigenous Knowledge というもので、わたしの最近の調査トピックでもあります。

例えばアボリジニのことを調べる Desert Knowledge Corporate Research Center というプロジェクトを見てください。コアプロジェクトの一つが、内陸部の生活ですが、ブッシュ・プロダクトというトピックがありますね。アボリジニたちが住んでいる場所をブッシュと呼びます。そのブッシュの中にあるワイルドナッツとかワイルドフルーツのようなものをブッシュタッカーと言います。タッカーというのは食糧のことをいいます。今、このブッシュタッカーをレストランで出すというのがオーストラリアでちょっとしたブームになっています。このブッシュでアボリジニたちがどういう食べ物を食べているのかというのが、改めてアップデートなトピックになっています。彼らがブッシュに関するどのような知識を持っているのか調査していくと、結果的にはレストラン業界をサポートすることになるのでしょうか。レストラン業界が直接金を出さなければありませんが、こうした食品業界と、例えばレストランにブッシュフードを流通させようと思うと流通のためのトラックの配送会社や卸屋さんとか、その他といった業界が全部動きますから、言ってみればブッシュ・プロダクトというのは結構おいしい話です。

次のデザート・ビジネスですが、環境人類学的なことをやる連中はこういったことに飛び付きます。例えば四輪駆動のトラックをブッシュの中に持ち込むと、轍をつくってブッシュの環境を破壊するので、その進入をどういうふうにして阻止するのか、あるいはルートはどう限定するのかという調査をします。こういったことをプロジェクトとしてやるためには、関連して植生の研究者は調査ができるわけです。そして、さらにツーリズムが進んでいったら、アボリジニたちにどういうふうなキックバックができるのか、あるいはどういう影響を起すかということで文化人類学の連中

が調査をするという形になります。

こういったプロジェクトは外部資金がはいってしまっていて、この Corporate Research Center がそうした資金を配分するバーチャルな組織をつくっています。入り部分と出の部分をマネージする組織が必要なんです。ANU では Research Office がまさにそういった役割を果たしています。全国レベルで行くところいった Desert Knowledge CRC, CRC というのは Corporate Research Center ですが、こういったセンターの役割が非常に重要になってきています。

ANU などの場合だとセンターという名前のつく組織が、こうしたプロジェクト的な役割を担います。たとえば、Centre for Cross Culture Research という、わたしとほぼ同世代のハワード・モーフィがセンター長をやっているセンターがあります。このハワード・モーフィの狙いは、彼の関心事であるアボリジナルアートに関する研究をやると同時に、例えば映画を撮ったりするという含めたビジュアルアート系でデータベースを構築していくプロジェクトを動かすセンターとして、外部資金及び ANU の中のプロジェクトファンドを取ってきてセンターをつくりました。

大体数年たって業務が終わると、もう金は打ち切りとなりセンターはなくなっていくのが普通なのですが、センター長がしっかりしているとそのプロジェクトが次々と転がっていき発展していきます。

先ほどの連携大学院組織の中にもうひとつあった Centre for Aboriginal Economic Research のセンター長のジョン・オルトマン、彼もまたわたしと同世代ですが、彼は非常にやり手で、要するに経済だから金を取りやすいということもあって、積極的に外部資金を取ってはプロジェクトを動かしてやっています。

そして、同時にこうした組織も大学院教育の一端になっている訳です。

こういったものが ANU の中でのやり方ですが、今では外部の組織として複数の大学や研究所を連携した CRC がつくられています。先ほど例に挙げたのが Desert Knowledge の例ですが、Tropical Savanna CRC というものも現在つくられようとしており、ダーウィンにある Charles Darwin University がセンターになっています。でも事務組織としては数名でやっている非常にこぢんまりとしたもので、バーチャルにメーリングリストやホームページなどといったようなことでメインに連絡を取り合い、カンファレンスをやり、それからリサーチファンドを取ってきて回していくことをやっています。

こうした連携的な調査を行っていく背景としては Normalisation というキーワードであらわされる、オーストラリア政府がアボリジニ人用の省庁を解体して通常の省庁にファンドを全部分散させた政策があるとおもわれます。その結果としてファンドは大きくなったので、例えばアボリジニの居住に関する調査をやりたければ、昔は ATSIC というアボリジニのための組織からファンドを取ってきていましたが、今はそうではなくて中央省庁の、例えば住宅省といったようなところからリサーチファンドを取ってきてやるという形になっていて、実はアボリジニの調査環境としては、外部資金としては大幅に拡大しているのです。

そうとは言え、大学院生のフィールドワークは実は結構大変なのです。例えば単独のフィールドワークをやるとうまくいかない場合が問題なのです。あらかじめコネクションがある場合、例えばアボリジニの親族ネットワークに組み入れられるような幸運な人は全然問題なく入れます。あるいは現地コミュニティにリサーチプロジェクトのアプリケーションを出して、いいと言ってもらえればもちろん大丈夫です。

しかし、例えば、ある大学院生が、アボリジニ・セツルメントにおける環境に関する伝統的知識の分析をトピックとして調査届けを出して断られた事例を出してみます。断られた理由は、現地社会はインタビューに疲れているから駄目だということですが、それは表向きで、本当はどういうことかと聞き直すと「そんな調査をやって還元できる要素がない」というのです。先ほどお話しした Desert Knowledge CRC で大規模なプロジェクトをやっているのだから、そういったところで大学院生が入ればいいと言われました。

それからプロジェクトに参加する場合、Desert Knowledge CRC や Tropical Savanna CRC などの一員になっていけば、例えば、大学院生の研究テーマの『アボリジニ・セツルメントにおける環境に関する伝統的知識の分析』や『アボリジニによる人為的ブッシュ環境管理に関する比較研究』などといったようなことは受け入れられるでしょう。これはアボリジニの知識に関する評価として主流社会に還元し、ナショナルパークの森林管理等に生かすことができるなどということなので、名目がつくので通してしまうのです。

また例えばロッキーマウンテンという、岩山でござつたところを通過するような伝統的なアボリジニのブッシュ・ルートの復元というようなプロジェクトを出すと、これはまさに伝統的知識の復活ということでアボリジナル・アイデンティティの再構築に非常に

プラスであるとして通ってしまいます。この後者のほうは Land Council のプロジェクトです。

それから院生がフィールドワークとしてできる状況はもうひとつあります。例えば Land Council などの構成員として現地入りするなどです。例えば現地コミュニ

ニティから、中華料理に使うナマコの交易を再復活したいというプロジェクトで海洋資源を調査してほしいのだが、ナマコの生態というのは分からないのでやってくれないかというようなことを言われると、ナマコ研究者が行くことができるというようなものです。

司会：どうもありがとうございました。フィールドワークをやる学問などでも、わたしたちの場合は、調査対象が生きている方々ということもあって、ほかの分野に比べると調査成果の還元というのが非常に課題なのですね。とくに日本で、考古学や民俗学の研究をされる場合もそうだと思うのですが、オーストラリアというのは非常にそうした側面が強いですね。ほかの地域と比べても先端を行っています。

わたしがやっているアフリカの場合、そうした問題についてはまだいってみれば後進地域といえますが、あまりそういう問題が表面化しない。その意味では、まだ楽な世界なのですけれども。そういった点でわたしも非常に勉強になったところが多々ありました。では、フィールドに関することで、大学院教育、われわれスタッフとしては、これからこういった課題と向き合いながら、名大の大学院をよくしていくためにも活用していく必要がありますので、その項目に関する質問やコメント、あるいは杉藤先生にお聞きしたいなども自由に尋ねていただきたいと思います。では、どうぞ自由に。

Q：文学研究科の周藤と申します。今日、新鮮にお話を聞かせていただいたのですが、一回お伺いしたいことがあります。まず、これはお話の中では CRC などが資金をどれくらい持っていて、事務的な支援がどう保証されているのかということをお伺いしたいのです。つまり、日本でももちろんこのイニシアティブがいろんなものを次々に取ってつないでいっているわけですけど、なかなか難しいのが事務的な支援なのですよね。派遣の場合の雇用は、今は5年まででしょうか。これでもよくなった、3年から5年になったわけですが、でも5年を越えて再雇用はできませんから、例えばこのオフィスをさまざまな大学院生のリサーチの拠点にしようと思っても、さまざまなノウハウを持った事務員というものを置けないのですね。そこで、CRC といったところではどのような事務組織というものを持っているのか、もし、お分かりなら。

A：状況は一緒とっていいと思います。やはり彼

らも事務的な組織をどう構築するかというのはとても大変で、例えばさっきの ANU の中のセンター、Center for Cross Culture Research などというものをつくっても、その事務組織もまた一から構築しなければいけない。少なくともそのプロジェクト、ファンドが続く間は雇用できるのですが。

ただその3年、5年という縛りはひょっとしてないかもしれませんが、そのファンドが切れたら終るといって契約になっています。だからやはり同じ問題を抱えています。ただセンターのほうはそうなのですが、CRC の場合はもう少し柔軟かもしれません。かなりバーチャルな組織になっていて、いろんな人がいろんな形でかかわるような組織になっているのです。ただ、リアルな組織としては1つですが、ここの大学では一応受け皿の役割をするということになっていて、例えばどこかの研究科が受けるというような格好になっている。ただ、その場合には当然のことながらいろんな細かな業務までは請け負わないので、結果的にはやはりバーチャルな組織がいろいろとやりくりしていくという形になっています。だからこれも先ほどのセンターと同じく、金の切れ目が縁の切れ目になる可能性が大だと思います。だからそのセンター長になっている人がどんどんプロジェクトを継続しながら、拡大あるいは派生させながら金をつないでいくというのが、やはり生き延びていく……。

Q：普遍的な……。

A：ええ、テーマだと思うのですよ。

Q：分かりました。どうもありがとうございました。それから大学院生のフィールドワークに関してなのですけれども、大学院生が独立して研究できるような研究助成はどうでしょうか。

A：ありますね。日本と違うのは奨学金がとても充実しているので、多分 ANU のハイアードイグリーリサーチのほうの連中はほとんど全員が何らかのフェロシップを持っていると思うのです。コースワークやアンダーグラデュエートの連中も、もちろん全員ではありませんけれども、結構もらっています。さらに、フェロシップの中にリサーチファンドというも

のもあって、とくにハイアーディグリーリサーチのほうの連中はそういったリサーチファンド付きのフェロシップをもらっています。

Q: そのフェロシップは大学のものでしょうか？

A: 大学のものもありますが、大学とは限らない。それから、日本の科研のような、要するに学術振興会のようなところの組織が出すものもあります。より多様だと思います。

Q: それはとくにフィールドワークに関連したことに関して言うと、とくにオーストラリアの中でこういった人類学的な研究の持っている社会的な重要性が認知されているからということですか。それともほかの分野でも同じなのですか。

A: これは別に人類学のハイアーディグリーリサーチだけではなくて、フェロシップは全領域対象なのです。奨学金とリサーチファンドを出すというシステムは日本と比べても優れていると思います。やはりこれは税制と絡んでいるのですが、とても寄付金控除率が高いあちらでは、小金を持っている連中は寄付したほうが得なので、どんどん出します。日本の場合は控除率が低いのでお金持ちもあまり寄付する甲斐がないのですが。

Q: 就職の方はどうなのですか。つまり先ほどの話などでは人類学領域などで Land Council でしたか、そういったところへ就職する道はあるという話でしたけれども。

A: Dの学生はやはり就職は問題なのですが、今日はちょっと話の中では触れませんでした。オーストラリアの特質としては大学院生は結構年齢構成の幅があるのです。例えばもう60代になってから大学院の博士課程で博士号を取るなんていうものもいて、わたしがフィールドで会って、白人のおじさんが何かやっていると思い、孫か何かいたところに遊びに来たのかなと思って声を掛けたら ANU の博士課程の院生で、さっきの18カ月の調査で来ているのだと言うのですよ。まず彼はしっかりと論文を書いたのですけど。そういったものも含めて大学院の中は結構年齢構成が豊かです。

だからその場合もふくめて、必ずしもみんな研究者になるというわけではないのです。例えば企業とか、教会関係者とかで、アカデミズムとは違う世界の人が大学院に入ってきます。

それからもうひとつちがうのは、パートタイムスチューデントという制度がとても発達しています。つまりオーストラリアは大学院のプロスペクタスにも書いて

ていますけれども、例えば Postgraduate Coursework というのは1年間の制度なのです。とても短い制度なのですけれども、さらに、そのハーフタイムになると2年間というふうになっていたりするというようなことがあって、要するに履修期間を延ばすことで、あまりコース枠にとらわれなくてすむ。さらにハーフタイムというのは、例えばワンセメスターを行って次の後半の第2セメスターのときには働いている。また1年か2年たってから別のセメスターで復帰するというようなたぐいのことができる制度なので、日本のように入ったらとにかく少なくとも満期になるまでいたほうが良いという制度ではないのですね。だから半年とか1年。半年単位、あちらはセメスター単位で構わないので、1セメスターでいなくなってしまうという院生が結構ごろごろといるのです。

オーストラリアの大学院は、パートタイムと社会人という制度があるので、Dの学生が必ずしも職を求めているわけではないですね。その点教育する側からするととても助かっていると思います。でも、もちろん、就職について頭をひねっていることは確かですが。わたしがお世話になっているニック・ピーターソンという先生はなかなか優秀な院生を多く育てた先生です。先ほど名前を挙げた第4世代の連中のジョン・オルトマンもニックの弟子ですし、ハワード・モーフィもニックの弟子です。ルーク・テラーは違うのですがスーパーバイザーを長くやっています。スコット・ケインも弟子です。私がよく知っている人たちの名前を挙げているのですが、ANUの重要な組織の中のセンター長になっていっているというのがあの連中なので、明らかにニック・ピーターソンはそういった養成をうまくやっていたことは確かだろうと思います。だからきちんとそういったものを押し込んでいっているのです。ただ彼も若い世代をあまり押し込んでいないので、やはりその当時の院生がよかったからかなと思いますけれどもね。

Q: チュートリアルのことなのですからけれども、具体的にどのようなことをされているのでしょうか。

A: 毎週、ひとつの講義に対してチュートリアルの時間というものがもうけられていて、そこにチュートリアルを必要とする学生が時間と場所を指定されてやって来ます。多くの学生はそこに用意されているビデオ資料のようなものを見るとか、ファイルされているいろいろなリーディングスを読む、というようになっています。チューターの院生がいつも何か授業のようなことをやっているのではないのです。また、教員も

その部屋にいる訳ではない。ただ、研究室にいるようです。やって来た学生がどういう論文を読めばいいのかとか、その次にどれを読めばいいのかというアドバイスを求めた場合にアドバイスをしています。どのビデオを見ればいいのか、このビデオを見ろということを担当教官は言うのですが、それを見たあとで、面白かったのもっと見たいのだけど他にないのかというようなことを言うと、そのチューターはそれに代わってアドバイスをしていくという感じです。

Q: チュートリアルの場合、教員はどのような役割を果たすのでしょうか。アドバイスをするだけなのでしょうか。

A: チュートリアルの準備についても、教員が全部やっていますね。たとえば、ニック・ピーターソンは毎年、毎年そのセメスターのブレイクになると、大量にコピーをしてきつきのリーディングスなどもつくり直しています。やはりアップデートなトピックを入れようとするようで、ベーシックなものやアップデートなものを両方うまく組み合わせています。全部をつくりかえるということはやらないのですが、目についたリーディングスを付け加えたりしています。やはりそれは教員がやっています。コピーをするのは実はほかに部署があって、コピーセンターのようなものがあるので、製本したりする作業は、そちらでやりますが。そうした部署に持って行って、リーディングスなので大学の費用で何部というところにつくってくれて、取りにいったら、そのチュートリアルが行われるコモンルームのところに置いていくと、そこから学生が取っていくというふうな格好になっています。

Q: 英語学の天野と申します。わたしもオーストラリアに詳しくないですが、オーストラリア英語の調査でシドニーやメルボルン辺りの出身の方に年に2〜3回もいっています。

A: はい、そんなにいらっしやる。

Q: ええ。わたし自身、オーストラリアの大学でアボリジニの方を何回も見掛けたことがあるのですが、大学の中では学生としては、実際には……。

A: いまですね。

Q: 見たことがないですね。やはり高等教育の中には、未だ少ないということでしょうか。

A: アボリジニに関する高等教育はまだまだ遅れているというか、そういった状況だと思います。それはふたつ理由があって、ひとつは彼らの社会的な階層はどうしても下のほうに組み込まれているので、なかなかはい上がってこられないためで、教育としては高等

教育の中になかなか入れないということです。

もうひとつは、今度は逆にリモートのアボリジニ・セツルメントにいる連中にしてみると、その中から出てくるのはとてもエネルギーのいることなので、やはり出ていかないのです。だから多くの場合、よく行って高校までとまってしまふのが多いです。ただ最近はこの大学もアボリジニを教育するセンターというものを持っています。例えばシドニー大学でも **Koori Centre** というセンターが教育学部の中に置かれています。**Koori** というのは、オーストラリア南東部のアボリジニたちの自称です。このセンターは、アボリジニの人たちの学習支援をするための組織で、大学内のアボリジニの学生を支援するだけではなく、シドニー市内にアボリジニのセツルメントがあるので、そういったところのサポートも行うような組織でもあります。

でもやはり人数が非常に少ない。例えばアボリジニの血を引く教員が何人いるかということ、本当に数えることができるぐらいの人数しか実はまだいません、残念なことに。それはやはりひとえに高等教育を受けていない、博士課程まで終えていないとなかなか教員になれないというのは、日本もオーストラリアも共通です。当然のことだろうと思います。わたしたちよりも若い世代でも大学の世界にアボリジニはあまり残っていません。

アボリジニで優秀な連中が行くところは、ビジネスか政治です。研究サイドにはあまり来ないようなのです。政治の世界は今、政権を取っている自由党国民党連合のほうはアボリジニ政策をあまりうまくやらないのですけれども、どちらもアボリジニの血を引く国会議員だとか地方の議員は抱えています。やはり政治家を目指すというのは、今彼らの重大な関心事は政治を変えなければ駄目だということにあるので、そちらに行きます。大学を終えて大学院に行くよりもむしろそちらの方向に、例えばビジネスに入ったり、それから誰か政治家の秘書になったり、あるいは運動にかかわるなどというふうに展開していく連中のほうが若い人は目立つと思います。

Q: 低学年、中高教育では、アボリジニもオーストラリアの教育制度の中に組み込まれているのですか？

A: はい、そうですね。リモートの地では、アボリジニの人口比が高いところは現地語での教育も考慮している場合もあります。ただ、そういったバイリンガル・エディケーションというのは、逆に言うと内容を薄めますよね。結果的に学力低下につながるというこ

とで、英語教育だけで十分だと叫ぶアボリジニの親もいるぐらいですけどもね。それと政府の側もあまりバイリンガル・エディケーションということにいい顔をしないで、金を落とさなくなったので、最近バイリンガル・エディケーションというのは、どちらかというとする気味なのです。

オーストラリアは別にアボリジニに限らずどの言語集団でも自分たちの言語を維持しているセツルメントが結構あるのです、いろんな言語において。だからそのバイリンガル・エディケーションもしくはネイティブ言語を壊さないような形での言語教育というのを、とても意識してやる必要があることは確かです。でもアボリジニはなかなかそういった学校教育の中の条件も含めて、上まで上がってこようとは……、やはりハンディが大きいですね。

司会：先生、何か？

Q：はい。専門は日本史で古代史なので、ほとんど中身のことはわからないのですが、わたしの専門の観点から何かということではないのですが、資料収集のお話があったと思います。調査にはいることによって現地の経済を変えてしまうとかそういった問題はないのかどうか、お考えをお伺いできればと思うのですが。

A：そこは大変悩ましい問題ではありますが、アボリジニの場合はもう物価も主流社会と同じ中で生きている、逆に言うともしろ高いのです。リモートに住んでいるので運賃が高いためスーパーマーケットに売っている肉の値段も高いのですよ。そういったことを考えると、お金が落ちることによって影響があるかと言うと、むしろ彼らは助かるだろうと思うのですね。だからそういった意味で、例えばアフリカのブッシュマンのところでお金をやったら彼らの経済を変えるなんという話とはだいぶ違うと思います。

アボリジニの経済に関しては、すでに太平洋戦争後は明らかに貨幣経済の中にどっぷりと引っ張り込まれています。その意味ではやはり対価としてお金を渡す、例えば絵を買うからこれを渡すというのを彼らは充分理解しているので、むしろそれは向こうが要求してくる場合もあります。

例えば全部酒を飲んでしまう、とにかく酒がひどいのです。それから麻薬に使うとかそのたぐいに金を使いますね。でもそれは逆に言うと、アボリジニだからそういった方向に行くというように見るのはわれわれの偏見であって、それは青少年非行みたいなものですね。別に特段アボリジニの問題でも何でもありません。

からお金をあげることに自体に関する問題は恐らくはあまり罪の意識を感じることはないのではないかと思います。この場合はね。

Q：例えば人を雇用するというような場合のときはどうでしょう。

A：ええ、主流社会と同じように払う必要があるから、金を払うとなるとすごく掛かってしまう。もちろん金を払わないで済ますという方法もなくはない。つまり従来の人類学の調査なんてよくありがちな事ですけど、別に学問の名目を振りかざすことはないのですが、例えばあなたたちの生活を世界に伝えることができるのか、ほとんどだましているのではないかとというようなことを言って聞き出すというのはずいぶんやってきましたからね。しかし、わたしは1時間拘束したから「ごめんね、はい、10ドルあげるね」ということは、特段やったことはないのです。どちらかと言うと、わたしは、やはり絵を買ってあげてそのお金を渡しているという格好にできる限りしようと思っていました。

今後調査をする人に影響があると申し訳ないということもあるので、話をした、インフォーマント料としてはできるだけ払いたくないというような思いは持って接しています。できるだけ具体的なものを買うという形で、ちょっと余分に払ったりすることもありますし、還元するつもりをやっていました。あるいは逆に現物支給をするということもやりました。僕が例えばスーパーに行ってガバッと買ってきて、どうぞというような。こうなると自分のほうも罪悪感が少し薄れるのですけれども、例えばそれはインフォーマント料だったりするのですが、お金で渡していなくて現物で渡していると「これならいいかな」という気はしたりしていたのですけれども。

司会：自己満足？

A：これは自己満足ですけど。

司会：確かに今言われたことというのはケースバイケースで本当に難しいのですよね。われわれもやはり同じような問題を抱えています。確かに理想を言えば金が絡まない関係が望ましいのですよ。やはり例えば人種が違っていてもお互いに好意で教えてやろうとか、それが非常に理想的であるのですけれども、これは地域によって全然違いますから。始めからあからさまに金を出せという人もいますし。だからそれはもう本当にそこで考え方を自分で決めるしかないのですよね。

Q：アボリジニの場合にこう、何て言うのかな。ア

ポリジニの人口と研究者の人口の釣り合いというか、つまりこれだけ有名な研究対象であると、何かイメージからすると数少ない研究対象にたいして、世界中から研究者が群がるようなことになっているというようなことはないのでしょうか。

A: 実は、それほど群がってはいないと思います。日本人の人類学者はアボリジニのことはあまり関心がないのか、調査研究は本当に少ないのですよ。もちろん、なんで日本人が研究するのかという事がありますけれども、アボリジニ研究は少ないですね。日本の人類学のメッカは、南米と南インドと中国と、それからアフリカというふうに大体相場が決まっています。

オーストラリアでは確かにアボリジニの人口は40万人しかなくて、その大半は都市に住んでいるのであまりフィールドの対象ではないということからすると、アーネムランドというのは人類学者がもうメッカのように行っているところであることは確かで、彼ら調査なれしているともいえる。だからこの前に来た人にも同じことをしゃべったというようなことも言うし、例えば親族のことなんて聞こうものならやつら、とうとうとしゃべってくれるのですけど、それは全部バイアスが掛かっています。

「あなたの社会は、こうなのだよ」というようなことを言ってしまう研究者もいるので、そうすると現地の人たちは、人類学者が再構成したものを話してくれるのです。その意味で、本当に調査ずれしている連中なので、何かえらく整ったことを言うやつもいるのです。その調査ずれした連中から本音の部分聞き出すというのは、これはまた結構大変でして、そういった意味で結構厄介なフィールドの場所だと思います。

ある種、インフォーマントとしてはインタビューされたらこういったことを言うとエンターテインできるということを全部分かっているわけです、かれらは。だからもう本当に楽しませてくれるやつもいたりするわけです。これは怪しいと思って、こっちは構えて、まゆつば、まゆつば……でやるのですけれども。でもうっかり院生であまり経験のない連中がポンと入ると、絶対にそれに嵌められる可能性もあって、少しリサーチプロポーザルでもんで、もんでやっておいて、「おまえ、そんなんで絶対やつらにむしられるぞ」と言い聞かせてからでないとはやはりやばいかなという気がします。

司会: 日本の場合、沖縄なんかでは、そうしたことがありますよね。調査者がこれまでもたくさん入っ

ていて、研究書や報告書の内容も知られている。だから、どういう対応をすれば研究者が喜ぶか知っているんですね。まあ、こんなことは向こうにはいえなくてすけれど（笑）

A: そうそう、それに似ているのですよ。もうアボリジニのところなんて、調査報告山とあるからね。

司会: 向こうの人が、研究者に「おまえは勉強が足りない」なんて（笑）

Q: 今、院生の話が出ましたけれども、先生が例えば若い日本人の学生が関心を持って大学院に行くので勉強をしたいというときに、日本でどのような指導をすることがご自分の研究を将来に発展させる上で重要だとお考えですか？ 抽象的で申し訳ないのですが

A: ここにいる名大の院生のうち二人がうちの学部と大学院でのわたしの指導生だったので、かれらを目の前にして何とも言いにくいのですけれども。僕は少なくとも椋山女学園大学の大学としての位置づけを考えると、やはり基本的には研究者養成のところではないということもあるので、わたしは学部生にしても大学院生に関してもアボリジニのことをやれというようなことは極力言わないようにしています。むしろ学生がやりたいことを「あ、それだったらこういった方向がいいよ」というふうに指導するという方向を目指しています。

だからその意味で研究者養成をしている大学院の担当者とは、わたしはスタンスが違うと思います。ただ、例えば学部の学生でも今までもアボリジニのことをやりたいと言った学生もいますが、アボリジニのことを素材としては扱うけれども、もう少し一般的なトピックを扱うような形の指導というものを自分としてはできるだけやったつもりです。例えばこの人間情報学研究科でお世話になっている別の一人も学部で指導したことがあるのですが、これはアボリジニを主人公にした商業映画を分析する、つまり表象としてのアボリジニを分析するということで卒論を書かせた事があります。そのときでも彼女にアボリジニのことで行けというようなことは全然言いませんでした。

オーストラリアからビデオをたくさん買って支給しましたけれども、そのとき指導したのは、むしろ映像人類学で行けと、要するに映像を使った方法を確立するような方向で行けというようなことを言いました。それでこちらに入ってからアメリカの西部劇映画の分析をやって、修士課程を終えて、現在、博士課程でお世話になっています。

梶山の目指しているということからすると、むしろつづしの利く方向への指導ということになりますかね。オーストラリアのアボリジニの研究なんてやると、これはどう考えても先行きは、やはり ANU に行くしかない、という話になってしまって、ハードルが高くなってしまいますから、アボリジニの研究そのものをやらせるのは苦しいのですよ。佐々木さんに言われて、ここの研究科の院生でアボリジニのことをやりたいと言っている学生がいる。そのアドバイスをしてくれと頼まれて、アドバイスをするというのはいいのです。主体は、名大の側にあるから、わたしはあくまでもアドバイザーとしていろんなことを言えるので、それはお引き受けできます。自分の大学院生とか学生に対しては少し違うようにしているつもりなのです。果たして本当はそれでいいのかどうかというのは、現実にはよく分からないところです。

ほかの大学の院生でアボリジニの研究をやりたいと言っているものが目の前に来ては去りというのは結構いますが、アボリジニの研究をずっと継続してくれる院生が少ないのです。これのひとつの理由は、人類学のフィールドワークはやはりエスノグラフィー（民族誌）を書くのを目指すような、ある種フレームワークが人類学教育の中にはありますが、これがストレートに通じないのがオーストラリアなのです。

最初からすごくアプライドで、常に具体的に結論を出せという方向に持っていかないと論文を書けないので、それが若い連中にはつらいのではないかと思います。でもオーストラリアの人類学者や院生はというと、逆にそういった就職先があったりするもので、別に研究者にならなくても人類学をやっているのも大丈夫。しかもそのトピックは全部プラクティカルで、多分オーストラリア人の院生は大丈夫なのです。でも日本人の院生はやはり日本に帰ってきて人類学の教育をしようと思うのではないかと。現時点での人類学の若いスタッフを見ていると、すごくアプライドな人が増えているのは確かなのですが、でもまだまだ日本の人類学の本流は伝統思考が結構強いですね。

司会：オーストラリア、最初は、アボリジニのイメージ、映像とかを見て関心を持つだけでも、実際にいざ行ってみると……。

A：行ってみたら全然違う。

司会：実際のところは、えらく違って、ロマンを持ちにくいと思う。

A：うん、持ちにくい。もうあっという間にロマンは消えるのではないですか。もちろん全員消えたわけ

ではなくて何人か残って、研究者を目指す若手の研究者はいる事はありますが、これが帰ってきて使い物になるかどうかというのはまた別の話ですからねえ。

Q：わたしの場合、よく行くのはシドニーのマコーリー大学ですが、やはりパートタイムの学生の数が大勢いるのです。ANU の場合は先ほど 1 万 3,000 人の中にパートタイムの学生は……。

A：込みです。

Q：込みの人数ですか。割合としてはどのくらいですか。

A：それも調べようと思ったのですが、なかなかいいデータがなくてよく分からないのですが、感触ですけれども 3 割くらいではないでしょうか。

Q：3 割くらいですか。コースワークの講義は先ほど何か、週 2 回というようなお話がありましたけれども。わたしもオーストラリアの大学に行って何よりもつらいのは授業に出ないかと誘われていったことがあります、3 時間も授業をするのですよね。しかも夕方 5 時から 8 時まで 3 時間とかいろんなこう……。

A：ユニットがありますからね、いろいろと。

Q：授業の形態によっては日本だと何が何でも 90 分、ディスカッションの時間であろうが、レクチャーの授業であろうが、セミナーであろうが何だろが何でもかんでも 90 分になってしまっているものだから、対応がしにくいのですよね。ところが、マコーリーやアメリカのほうだといろんな授業の形態によって時間の長さが違って、ディスカッションの時間とレクチャーの授業は、ANU の場合はどうですか？

A：僕も少ししかじただけなので、詳しくはよく分かりませんが、授業時間はいろいろあると思います。また、大人数の授業というものも意外にあって、いつも少人数だけでやっているセミナー形式が多いということではなくて、大教室での講義というのも結構やっていますね。講義でもやはりこのチュートリアルとリーディングスを使っていて、先生方はなかなかしぶとく講義をやってらっしゃるようですね。

司会：ANU では人類学のスタッフ人数がこれだけ多かったら、コマ数なども一人あたりは少ないのですかね？

A：そうですね、ただリサーチスクールの連中は、コマは持っていない、と言うかコマだけしか来ないというようなこともあるので、イエス&ノーですけれども、確かに教員は人類学だけでもざっと 20~30 人いるので、とても手厚く対応できることは確かですね。

Q: 日本だとコマ数が多いではないですか。学生も1日に3個も4個も授業をとっている。そうしたこともあってか、学生が予習も復習も何もしていないことがある。

A: 本当に単位数が多すぎますよね。もう学部生なんて時間割をみっちり詰め込んでしまうから。そんなのどうするの、やめろと言うのだけど結局取ってしまう。うちなんかだと4年生のときの就職活動のために全部すきすきにするために早い目に全部取ってしまうという。

司会: コマ数を削減してひとつずつの予習復習を重視するというような発想がなかなか出てこないですね。

A: だから文科省の設置基準での単位数という概念は、予習復習を含むとなっているのだけれど、実態はそのようになっていない。科目あたりの単位数が少ないからでしょう。

司会: このフィールドワークのことにしても、リサーチプロポーザルのことから非常にきっちりしていますけどね。制度的にはね。

A: 制度的にはね。でもいろいろとあって、わたしもそのリサーチプロポーザルの発表を聞きに行ったら「ああ、これは駄目だ」というものでも、結局はパスしていますね。

司会: オーストラリアの人類学者がみなよく勉強していると言えばそうでもないですか？

A: そうでもない。いろいろあるとおもいますよ。

司会: 結構自分の国の調査をする人がやはり多いのですか？ オーストラリアの大学院生というのは。あるいは海外に調査に行くほうが多い？

A: 海外に行きますよ。やはりアジア、太平洋というのは結構行きます。インドネシアとそれから太平洋、とくに、ポリネシアとメラネシアに行くものが多いですね。オーストラリアだけとは限らない。ただ、アンソロポロジストの肩書を得るためにはアボリジニ人類学を目指さないと駄目なので、その辺が少しつらいところなのではないですか、アボリジニに興味がない連中に取りつめれば。ただ、日本の人類学に比べると、オーストラリアではもっとプラクティカルな人類学が多いと思います。

スタナーというオーストラリアの人類学者は、以前、「3M」ということを言ったのですが、アボリジニ社会にかかわる白人の3類系に三つのMがあるということです。Missionary, Mercenary, Mischief というのが3Mです。これはまずミッションナリというのは、あのかわ

いような人たちを何とかしてあげなくてはという、要はキリスト教の布教だけではなくて、例えば境遇としてもとてもかわいそうだからあの人たちに家を建ててあげなくてはとか、そのたぐいのことを考えてアボリジニのセトルメントに入ってくる。これは別にそういった慈善事業をやりたいと言っているのではなくて、例えば人類学をやる連中の中にもミッションナリタイプの人類学者というものがあるというわけです。こういった、おせっかいなことを言うやつが人類学者の中にもいるのです。

次のマーセナリーというのは要するにぶったくっていく人たちということです。仕事場としてのアボリジニのセトルメントなので確かにアボリジニにかかわる産業というものが成立していて、結構予算規模が大きいのです。政府が結構投資をするので、そこで働くということは別に人類学者だけではなくて、働く機会としては結構あるのです。例えばメカニックとか、ビルダーとかあいつら連中がリモートセトルメントで働けば割増賃金をもらえるので非常に有利です。だから短期間バツと行ってバツと働いて、それでもうやめだと帰ってきて、南の方で余生を過ごしたりする連中、こういったのをマーセナリーといいます。プロジェクトとしてやってきてそして、去ってゆく人類学者というわけです。

そしてもうひとつのミスチフというのは、言葉の意味としては「いたづらっ子、やっかいもの」といった感じでしょうが、南のほうの社会の中ではやっていけないような落ちこぼれものです。こうした人たちが、アボリジニのコミュニティに入り込む。アボリジニの人はすごく心優しい人たちなので、その人たちだったら受け入れてくれるということでアボリジニの村にめっつと入っていく。人類学者として入ったはずなのに「あれ、まだいるよ」というのがいたりします。変なやつとってはなんですが、こうした一人がアメリカのニューヨーク市立大学だか何だかのプロフェッサーになったなどという、出世したものの中にはいるけれども。

3Mというのは、アボリジニ・コミュニティにいる3類型なのですが、人類学者にも当てはまると、じゃ、自分はどれだろう、などと、盛り上がって話し合ったこともあります。

司会: 時間が来てしまったのですが、この後、どうしても質問したいことがあれば個別にお願いいたします。それでは杉藤先生、いろいろと有益な話をどうもありがとうございました。

オーストラリア国立大学における人類学教育の教員組織 (2007年)

Graduate Studies in Anthropology - Staff

Research School of Pacific and Asian Studies

Professor James J Fox

Social organisation, oral traditions and the management of the environment in Indonesia (East and Central Java and Nusa Tenggara Timur), the comparative study of the Austronesian-speaking populations

Department of Anthropology, Research School of Pacific and Asian Studies

Dr Andrew Kipnis

Processes of subjectification; public culture; language and culture; kinship and gender; education; religion; development; postsocialist societies; China; east Asia; USA

Professor Mark Mosko

Melanesia; symbolism; social organisation; culture change; culture theory; cross-cultural comparisons among Pacific Island societies.

Dr Kathryn Robinson

Indonesia and Southeast Asia; development; gender; traditional architecture; medical anthropology; technology and anxiety discourse; Australia-Asia relations

Dr Alan Rumsey

Highland New Guinea; Aboriginal Australia; discourse, language and culture; indigenes and the state

Professor Nicholas Tapp

Ethnic minorities and the state; development and environment; semiology and history; transnationalism and diaspora; borderlands of southeast Asia (northern Thailand, Laos, Vietnam, southwest China)

Resource Management in Asia-Pacific Project, Research School of Pacific & Asian Studies

Dr Colin Filer

Papua New Guinea and Melanesia; environment and development; political and social complexion of landowning communities;

social impact of major resource projects; forest management of biodiversity conservation; the role of aid in national and regional resource management policies.

Dr Andrew Walker

Mainland Southeast Asia (especially Thailand and Laos); resource management; borders; space and place; trading and transport systems; regulation; globalisation

Centre for Tax System Integrity, Research School of Social Sciences

Dr Gregory Rawlings

Legal Anthropology, globalisation, regulation, tax havens, money laundering & financial crime, urban anthropology, transnationalism, land tenure, labour and multi sited ethnography & methodologies. Fieldwork areas include Australia, Andorra, Samoa, Singapore, Guernsey and Vanuatu.

School of Archaeology & Anthropology, Faculty of Arts

Dr Robert Attenborough

Human demography, malaria epidemiology, nutrition and growth, environmental adaptation, anthropological genetics, and Biosocial anthropology.

Dr Ashley Carruthers

Migration and other transnational processes, multiculturalism, consumption, cosmopolitanism, media, the Vietnamese diaspora, Indochinese communities in Western Sydney.

Dr Don Gardner

Social theory; Melanesian societies; cosmologies in historical perspective; cultural responses to material conditions (on leave until 2007).

Dr Chris Gregory

Political and economic anthropology, anthropological theory, India, Papua New Guinea, ethnographic film.

Dr Patrick Guinness

Southeast Asia, particularly Malaysia and Indonesia, urban cultures, theories and practices of development, religion.

Dr Christine Helliwell

Southeast Asia, social theory, gender, personhood and its relationship to different forms of sociality and identity, discourses of "development".

Dr Melinda Hinkson

Research interests include Aboriginal Australia; history of anthropology; cultural transformation; anthropology of globalisation and media; theories of culture and personhood.

Dr Ian Keen

Australian Aborigines; Aboriginal land rights and native title; Arnhem Land religion and society; Kurnai social history; philosophy of social science; the politics and ethics of research.

Dr Margot Lyon

Emotion; embodiment; critical medical anthropology/ transcultural psychiatry; anthropology of pharmaceuticals; religion and political ideology in Southeast Asia; economic globalisation and local social forms.

Professor Francesca Merlan

Social transformation, indigeneity, nationalism, language and culture; theories of social action, organisation, and consciousness; places and place-worlds; modernity.

Dr Nicolas Peterson

Social organisation, economic anthropology, applied anthropology, territorial organisation, marine tenure, hunting and gathering societies, fourth world people and the state, social change and development, anthropology of photography.

Dr Anthony Redmond

Research interests include; relational subjectivities, bodily experience, intercultural engagements in colonial situations, Indigenous Australian societies and economies, visual thinking, childhood and youth cultures, phenomenology and psychoanalysis, Native Title regimes and methods.

Centre for Aboriginal Economic Policy Research**Professor Jon Altman**

Economic development and economic policy issues for Indigenous Australians, land rights and native title, the economic engagement of Indigenous Australians with the mining, tourism, and arts and crafts industries, the Indigenous informal economy and theoretical issues in economic anthropology and development.

Dr Sarah Holcombe

Aboriginal Australia; The engagement of Indigenous organisations, such as native title representative bodies and small Aboriginal corporations, with development issues such as mining; Indigenous Governance, such as those issues surrounding regionalisation vs local autonomy; Land tenure systems and decision making processes; The anthropology of the State; The anthropology of organisations; The dynamics of "inter-cultural" and social change; Succession processes and re-territorialisation; Women's ritual and the gender debate in Central Australia; and Indigenous transport issues in remote areas.

Dr David Martin

Aboriginal Australia; applied anthropology with an emphasis on cross-disciplinary work; engagement of Aboriginal people with the general Australian society, including development dilemmas, issues of political representation, native title, alcohol issues.

Ms Frances Morphy

Cross-cultural translation; Indigenous governance; the representation of Indigenous people in censuses and surveys; land rights and native title; the Indigenous art and craft industry.

Dr R.G. (Jerry) Schwab

Indigenous Australians: education and training policy, literacy, youth, land and resource management education.

Dr Benjamin Smith

Aboriginal Australia; systems of land tenure; place and socio-cultural production; land rights and native title; the anthropology of the state; anthropological theories of subjectivity; 'diaspora' and 'local' Aboriginal communities;

population mobility and decentralization; anthropology and development in Australian and overseas contexts; social change and 'intercultural' processes; photography and anthropology; yoga in India and Australia.

Ms Diane Smith

Indigenous governance and representative structures; the socioeconomic status of Indigenous families and households; the cultural and policy parameters of Indigenous engagement with the welfare state; resource development and compensation; native title and land rights; and theoretical issues in policy and applied anthropology.

Centre for Cross Cultural Research

Professor Howard Morphy

Aboriginal art and religion, the anthropology of art and aesthetics, visual anthropology, the history of anthropology, the relationship between museums and indigenous peoples.

Mr David MacDougall

Ethnographic film; theoretical frameworks for visual anthropological research.

Dr Diana Young

Aboriginal Australia; material and visual culture, social construction of environment, colour, the senses, emotion. Anthropology of art, consumption.

Professor Luke Taylor

Aboriginal and Torres Strait Island artists; Aboriginal Australia; Anthropology of art; material and visual culture.

Dr. Monique Skidmore

medical anthropology; political anthropology and human rights; anthropology of violence;

peace and conflict studies; extra-state economies and globalization; ethnopsychiatry, ethnopsychology and the anthropology of the body; Burma (Myanmar); Southeast Asia; Buddhism.

Centre for Resource & Environmental Studies

Dr Deborah Bird Rose

Indigenous ecological knowledge and ethics; Indigenous and Settler landscapes in Australia and other settler societies; post-colonial possibilities for social and ecological justice.

Gender Relations Centre, Research School of Pacific & Asian Studies

Professor Margaret Jolly

Feminist anthropology, illness and healing, Melanesian ethnography and the colonial history of the Pacific.

Richard Eves

Melanesian ethnography (especially religion, bodily beliefs and social/cultural change); medical anthropology (especially international public health and HIV/AIDS); nineteenth century anthropological and racial thought; colonialism in the Pacific (especially cross-cultural contact and missionary history); gender and sexuality.

Tamara Jacka

Gender relations and social change in contemporary China; social differentiation in Chinese official and popular discourse; approaches to gender and development; women's NGOs, rural-urban migration; gender and suicide.

以上のリストは、ANUの人類学教育に関する連携大学院組織のスタッフ紹介ページ：

http://info.anu.edu.au/studyat/_Graduate_School/Study_Fields/_anthropology/staff.asp をもとに改変して作成。